

学生時代と図書館 47

「私の一生を決めた本」

赤野 一郎

「ここはどうして…なのですか。はい、君？」

「わかりません」

「じゃあ、後ろの人」

「わかりません」

「次の人」

「わかりません」

・・・・・・・・

「次」

「はい、それは…です」と私。

「その通りです」

ついにやった！指名された学生が、次々に席を立ち同じ返事を繰り返す。英文法の授業でのいつもの光景。でも今日は違う。やっと答えることができたのだ。

自分では英語ができるつもりだったし、さらに英語力を伸ばそうと思って入学した神戸市外国語大学だったが、その教授の授業だけは歯が立たなかった。英文法の授業なのに、使っていた教科書は、黒人作家 Richard Wright の短編小説、*The Man Who Went to Chicago*。読み進みながら教授の投げかける質問が、受験英語にどっぷり浸った私にはどう答えてよいのか見当がつかず、「そんなこと、考えたこともないわ」というのが、その教授の授業を受け始めたころの私の反応だった。

しかし答えられないことが悔しかった。なんとか答えたいと思い、教科書に指定されていたが、授業では使ったことのないその教授の著書、『現代英語の文法と背景』（研究社）を読み始めた。そこには、私がそれまで持っていた英文法のイメージ—無味乾燥で退屈—を覆す新鮮で刺激的なことが書かれていた。6月始めのことだったと思う。

それからの私は、大学図書館の参考図書室でその授業の予習に没頭した。なにを聞かれるかわからないので、少しでも疑問に思うことが出てきたら、その部屋にある辞書という辞書を手当たり次第

に引き、関係のありそうな箇所をノートに写すという作業を続けた。

私にとっては「事件」とも言える冒頭のことが起こったのは、夏休みも

間近に迫った頃だった。35年も前にその教授から発せられた質問が何だったのか、今となっては思い出せないが、図書館での予習が報いられたのをきっかけに、私はその教授の講義をひと言も聞き漏らすまいと必死にノートをとりだした。『現代英語の文法と背景』の中で言及されている参考文献を図書館で借り出しては、授業の終わった後、人気のない図書館の自習室で読みふけた。大学教員という確たる職業が頭にあったわけではないし、学問の世界を垣間見ただけの私だったが、夏休みに入る頃には、漠然と英語を専門にやっていきたいと思い始めていた。高校生の時には考えたこともなかった、いやそれどころか、一番なりたくなかった教師という職業を意識しだした。

それまで読んだこともなかった英語の原書を初めて読んだのもその頃のことだった。中でも R. A. Close (1962) *English as a Foreign Language* (Allen) は、衝撃的だった。ことばは表現者の心的態度の反映であることや、will と be going to の意味の違いをこの本から学んだ。丹念にノートをとりながら、自習室で読んでいたのをはつきり覚えている。今読み返してみてもその内容は新鮮で、80年代に入って認知言語学の Langacker 等が声高に主張し始めた名詞の「有界 (bounded)」と「無界 (unbounded)」の区別が、それより20年以上も前に巧みな図で示されているのは驚きである。

私の人生を決定づけた書物の著者であり、『ジーニアス英和辞典』（大修館書店）の編集主幹である小西友七先生に、井上永幸氏と私とで昨年出版した『ウィズダム英和辞典』（三省堂）をお贈りしたとき、「これからは私の仲間ですね」という葉書を頂き、これで今までの恩に少しは報いることができたのではないかと思っている。

あかの いちろう（教授・英語学）

